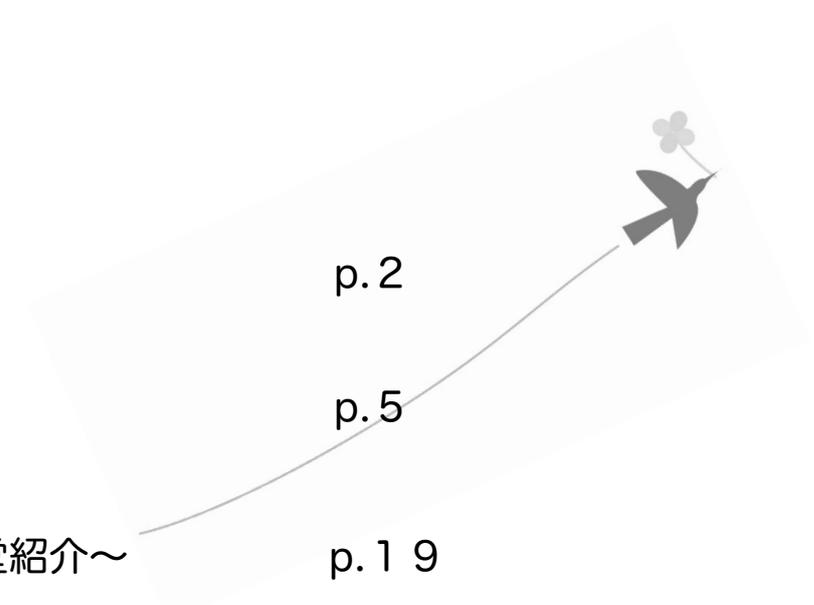


# 飛翔 第87号

## <目次>

巻頭言	p.2
研究室紹介	p.5
特集～広大の食堂紹介～	p.19
輝いている人	p.21
OB・OG 紹介	p.29
レビュー×レビュー	p.35
飛翔な日々	p.37
編集後記	p.42



# 巻頭言

## 乾 雅祝

(総合科学研究科 研究科長補佐)



### 「芸術、科学、そして教養」

私が広島大学総合科学部に赴任した一九九四年は、ちょうど総合科学部創立二十周年の節目の年であった。著名な先生方をお迎えして盛大に創立二十周年記念事業が催され、私はそのとき初めて「パラダイムシフト」という言葉を学んだ。当時、総合科学部に来たばかりで、他人事のように記念事業を傍観していた。それから二十年たって、昨年八月には総合科学部創立四十周年記念事業が催された。この間、私が経験したこと、感じたこと

を気の向くままに書き記す。拙文が何かのお役に立ったなら幸いである。

私の専門は物理学で、理学部で博士課程を修了した。最初に就職したのは、九州大学教養部で、約五年間お世話になった。文系理系の教員が同じキャンパスで生活・交流する教養部にいた経験は、理学部物理学科しか知らなかった私にとって印象深いものであった。

私が広島大学に赴任した時、総合科学部には、八つのコースが設けられおり、私は物質生命科学コースで教育と研究に携わった。コースの中では生命科学を志す学生の方が多かったと思うが、彼らも物理学の授業を積極的に受講していた。教育組織が六つのプログラム制に改組されたときは、創造科学プログラムで教育と研究に携わった。学生の志望に関わらずプログラム生には物質と生命の両方の実験を経験させることを目的に、創造科学実験という科目が新設された。その後、広島大学全体が到達目標型プログラム制に移行し、総合科学部は十プログラムに改組した。しかし、この細分化が、以前のような分野の垣根を越えた学生の交流を妨げていたようである。一年にわたる学部での検討を経て、今の二年生から一プログラム制で学ぶこととなった。

「総合科学部設立の精神に立てば、同

じ教育プログラムをずっと提供し続けることはありえない。精神は同じでも、総合科学の内容は、時代と共に改訂することが当たり前である。」これは、私が赴任したころに耳にした言葉である。この二十年で私自身が、まさにそれを経験してきたように思う。

総合科学部の英語名は、フアカルテイ・オブ・インテグレイティッド・アーツ・アンド・サイエンスーズである。私が赴任した当時、上司の田村先生は国際共同研究に関わっていて、主にヨーロッパから多くの研究者が総合科学部を訪れていた。その一人のスペイン人が学部名を見て、これは非常にいい名前だと何度も感心していた。英語名を直訳すれば「芸術と科学の統合」、意識すれば「文理融合」かもしれないが、以来、私は「芸術」と「科学」の組み合わせが気になって仕方がない。

芸術とは、「美を追求・表現しようとする人間の活動」と大辞林にある。芸術には誰でも関わることができ、その作品で自由に自己を表現できるが、美は他人が評価するものであるから、芸術で身を立てることは、とても難しい。実際、ゴッホの書いた絵は、彼が存命中には一枚も売れなかったという。また、万人が美を認める芸術作品が現に存在するから、後

進の芸術家は、それを超えるものを目指さなければ認められない。その意味でも非常に厳しい業界と言える。

一方、科学とは「自然や社会など世界の特定領域に関する法則的認識を目指す合理的知識の体系」と説明されている。あらゆる分野に精通した哲学者の時代から、特定の分野だけに精通した専門家の時代に移行したのは、ニュートン以降と言われている。科学においても、芸術作品同様、独創性が最も重要である。模倣は決して評価されない。しかし、科学の成果には、再現性という、独創性とは一見両立しないかのような、もう一つの条件が必要である。この条件は、科学の扱う領域を規定するが、同じ手続きを踏めば、誰でも同じ成果を享受できることを保証する。その積み重ねが、ガリレオやニュートンの時代から約三百年で、科学技術がここまで発展した所以と言える。その代わり、科学を志すためには、再現性を保証するための基礎知識や技術を、時間をかけて習得し、その能力を身につけなければならぬ。未熟な科学者が公表した間違った結果により、後進の科学者は、多大な損害を被る。まじめで正直と言うだけでは、科学の分野で活動してはいけないのである。ある研究倫理の教科書の冒頭には、「科学とは、過去から現代に至るまでの数多くの科学者による共

同作業のたまものであることを正しく認識しなさい」と強調されている。

さて、総科のある先生は、自分が携わる学問が、この再現性という部分で科学と同等たりえないと発言されたと記憶している。私は、再現性は、両刃の剣と思う。それは、科学の扱う分野を制限し、研究者に長期間の訓練を課す。文系でも、必要な語学や知識の習得には同様な訓練を要するが、文系の学問は、科学に比べて扱う対象の自由度が大きいように思われる。これらをまず学問の俎上に載せ、さらに科学の領域でどのように扱えるか試行錯誤することが「文理融合」の一つの実践形なのであろう。

ここまで述べたことから感じ取ってもらえると思うが、広大のキャッチフレーズ『学問は最高の遊びである』を実践するのは並大抵のことではない。芸術にしろ、科学にしろ、幼児の遊びでは、ただのゴミになってしまう。

赴任して十年目の総科創立三十周年では、再び著名な先生方を迎えて、記念事業が開催された。ある先生は、専門分野以外の分野を、深いレベルで習熟していることが、教養が深いことだという意味のことを述べられていた。このような講演を聴講した総合科学部生の一人が、先生方の考えておられる教養と自分達の考

える教養に齟齬があるように感じるという感想を、この誌上に公表していたと思う。

私が九大教養部にいたときから、第二次大戦前の大学の教養と、二十世紀末の大衆化した大学の教養は、同じものではないということがある。話題になつてきた。昔の教養に代わるものとして、「教養の根本は、細分化された学問分野を結び付けるものでなければならない」という考え方があつた。この意味で総合科学部の「文理融合」は、新しい時代の教養と同義と考えられる。約二十年前に大学設置基準が変わり、一九九四年三月末をもつて九大教養部は廃止され消滅した。同じころ全国の国立大学の教養部のほとんどが廃止された。このような背景の下、四十年前に教養部を改組して誕生した総合科学部は、教職員・学生が協力して二十世紀に相応しい教養を構築する責務を負っている。私たちは、そのことにも力を注がなければならないと思う。

昨年十一月は、日本人三名がノーベル物理学賞を受賞した。その中の一人、村博士は徳島大学工学部の卒業生である。十一月下旬に徳島大学で開催された学会に参加すると、キャンパスが受賞の喜びにあふれていた。その時は、大学、学部の一歩のサポーターは卒業生であるこ

とを実感した。卒業生各人の母校に対する思いは様々であろう。しかし、母校は決して卒業生を離さない。きつと、どんな時でも暖かく迎えてくれる。私たち教員のできることは、在校生それぞれが、卒業後に思い描いた人生を送れる手助けをすることだけなのかもしれない。

最初に述べたように、二〇一四年は総科創立四十周年であった。総合科学部は、これまで三十年以上にわたり卒業生を社会に送り出し、先輩方は様々な分野で今も活躍している。総合科学部の在校生や、「飛翔」や「無限への挑戦」を読んで総合科学部を目指す気になった高校生の諸君、この学部が輝き続けるように、教職員と共に道を拓いて歩み続けよう。微力ながら私もそれに向かって精進し、十年後には総合科学部創立五十周年を、是非、皆で祝いたいと思っている。

